

第4回コーポレートアートエイド京都
(Corporate Art Aid Kyoto)

NO.01

メコンの住人-パートーン-

彩蘭弥(Alaya)

ラオスで出会った魚の美しさ、生命力に魅了され、それを緻密に描いた。
サロン・ド・トーンヌ入選作品。

和紙に岩絵具、金箔、プラチナ箔

803×1167mm





NO.02

メコンの住人-パーナイン-

彩蘭弥(Alaya)

ラオスで出会った魚の美しさ、生命力に魅了され描いた作品。贅沢に箔を使い、光の当たり方によって様々な表情を見せる。

和紙に岩絵具、金箔、プラチナ箔

803×1167mm



NO.03

閉塞成冬

伊吹美郁

日常生活で空を見上げると良い気分転換になることから、空を題材に選びました。寒空の雲の様子を意識して描きました。

麻紙に水干絵具

1120×1450mm



NO.04

虹蔵不見

伊吹美郁

掛け軸のスタイルからヒントを得て縦長の構図に挑戦しました。

麻紙に膠彩

1620×1300mm



NO.05

ハピネス

太田 剛気

世相が暗い。この暗い時代に必要なのは明るい絵画だ。きれいな色と豊かな形、直感的に楽しむことができる構図。観た人の心に明るさを届ける、そんな作品をつくりたい。

キャンバスにアクリル絵の具

910×910mm



NO.06

BORDER 25.30

菊地 虹

抽象のなかで何かを描くこと。絵の具が絵の具でなくなる瞬間。さまざまなあわいのなかで、絵画の在り方を模索している。

キャンバス、アクリル絵具

1120×1455mm



NO.07

BORDER 25.31

菊地 虹

抽象のなかで何かを描くこと。絵の具が絵の具でなくなる瞬間。さまざまなあわいのなかで、絵画の在り方を模索している。

キャンバス、アクリル絵具

1120×1455mm

NO.08

馬場家の庭の中で

桜井 旭

2023年のGO FOR KOGEIにて富山の岩瀬にある
国登録有形文化財の旧馬場家住宅での公開制作
にて制作した作品。特別に庭での制作許可を頂
き、手入れされた美しい庭から、蔵が垣間見え
る風景を描いた。

油彩、キャンバス

910×1167mm





NO.09

The disappearing city II

桜井 旭

私が在学していた金沢美術工芸大学の2022年当時（2023年に現キャンパスへ移転）の校内風景を描いたシリーズのひとつ。二階から三階に上がる屋外階段の踊り場から見える風景を描いた。いくつものパースが混在するアングルが面白い。

油彩、キャンバス

1620×1303mm

NO.10

夜明け

周 志雄

この絵は、秋の終わりと冬の訪れを予感させる夜明けの情景を描いたものです。幹の部分には「亀裂」技法を用い、寒空の下で凜と佇み、なおも脈打つ大樹の生命力を浮き彫りにしました。

岩絵の具、水干絵の具、金箔

1620×1620mm





NO.11

まお

しんそう (Shinso)

宗教の俗の側面(神仏を演出する要素等)をテーマに制作する。本作は、からくりや舞台装置としてのお大師のようなイメージ。

キャンバスに墨、金泥、ペン

1620×1303mm



NO.12

森（のうねり）

津田 翔一

近くにいつもあり、通学路でもあったし、今も昔もよく入っていく身近な場所である森のを描いた。曲線と溶け合う色彩がうねり＝生命力を表現している。自分がこれまで身近で体感してきた「森」そのものの姿である。

キャンバスに油彩

1303×1620mm



NO.13

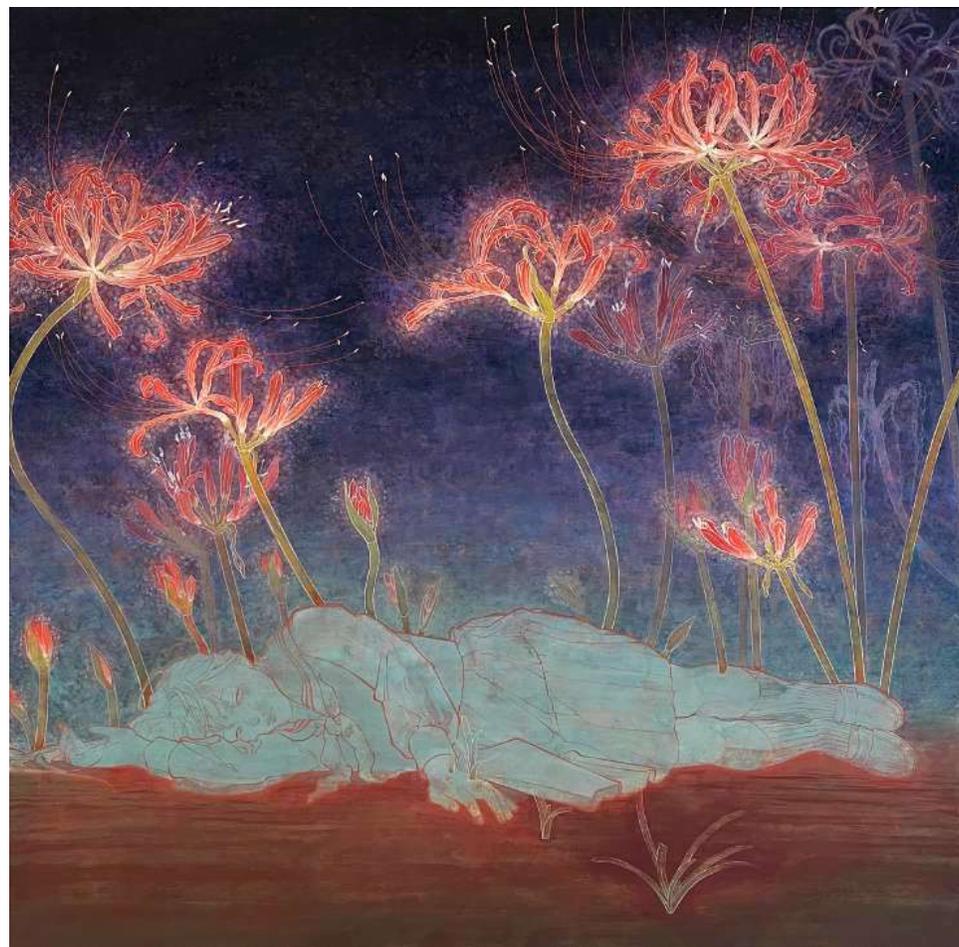
夕焼け

津田 翔一

自分の部屋から見える夕暮れの光景を描いた。山の稜線に沈む太陽である。いくつも存在する山の稜線に、直線ではない揺らぎの中で存在している世界の向こう側に沈んでいく太陽は、世界と生命（力）をダイレクトに表現できるモチーフである。

キャンバスに油彩

1620×1303mm



NO.14

99

常峰 すずか

99 という不完全な感覚を、花と葉が同時に現れない彼岸花の性質になぞらえ、不完全なまま続いていく存在と時間を表現しました。芽吹き始めた葉に、満たされない状態に宿る不安と希望を託し、画中の花と蕾は合わせて99個になるよう構成しています。

高知麻紙、岩絵具、水干絵具、顔彩

1455×1455mm

NO.15

うらら

常峰 すずか



春の光と風が生む影の揺らぎを、水中の乱反射のような感覚で描きました。盛り上げ表現によるマンホールや点字ブロックで通学路を示し、春の心地よい明るさの中に不安を抱えつつ希望へ向かおうとする移行期の心情を重ねました。

天竺布、岩絵具、水干絵具、顔彩、
胡粉、特殊顔料

925×1620mm

NO.16

次は何処へ

ネイネイ

「次は何処へ」は、現代社会における多層的なIDを探る作品です。

〈存在・欲動・記号・物語〉の視点から「東京少女」を象徴化し、デジタル社会に生じる揺らぎと重層化した複数のID像を提示します。この不確かさこそが、現代のIDの豊かさと生成的可能性を示しています。

アクリル絵具、キャンバス、パネル、アルミ箔

1200x720mm×2枚





NO.17

My Diary 2025 II

平野 えり

死生観を制作のテーマに、描きはじめてから作品の完成形を想定せず、日々その時その瞬間の思いを無意識の線に重ね“今この時・この瞬間を刻む”ということをテーマに作品制作を行っています。

ミクストメディア、紙、パネル

1964×1644mm

NO.18

意志

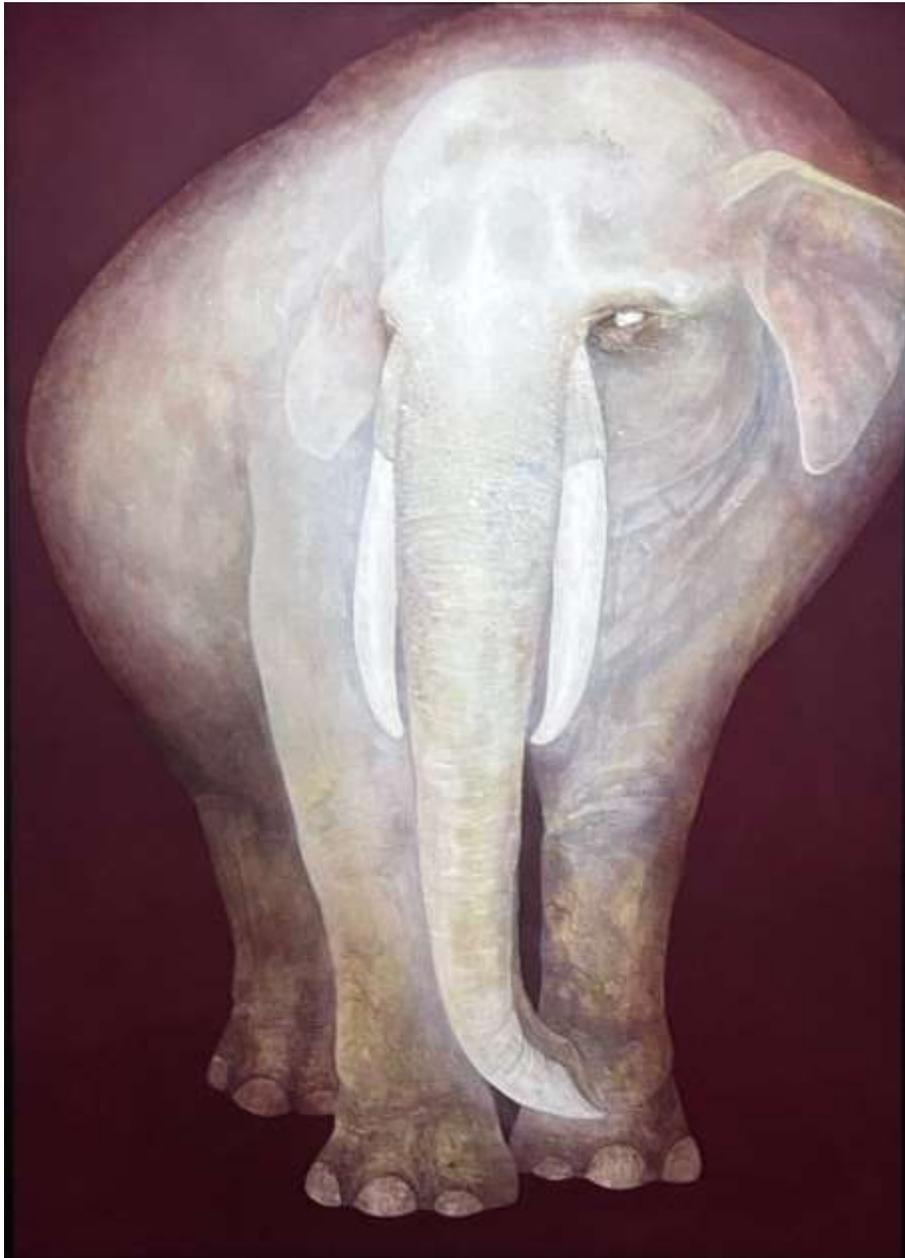
藤木 芹圭

自宅で飼育している金魚をモチーフにして描きました。一匹の金魚を大きく描写する事で、個としての生命が内包する美しさと力強さを表現しています。

木製パネル、岩絵の具、泥絵の具、膠、雲母、麻紙

1303×1620mm





NO.19

使い

森川 深雪

京都市動物園の象を取材すると同時に、昔の画家が描く神様としての象を追体験する感覚で描きました。

紙本著色

2273×1620mm

NO.20

冷寂

山中 翔

茨城県取手市内の農地に雪が積もった時の取材をもとに制作しました。どんよりと暗い地平線付近の空と、真っ白な雪原の対比が美しいと感じました。

紙本著色

1120×1455mm





NO.21

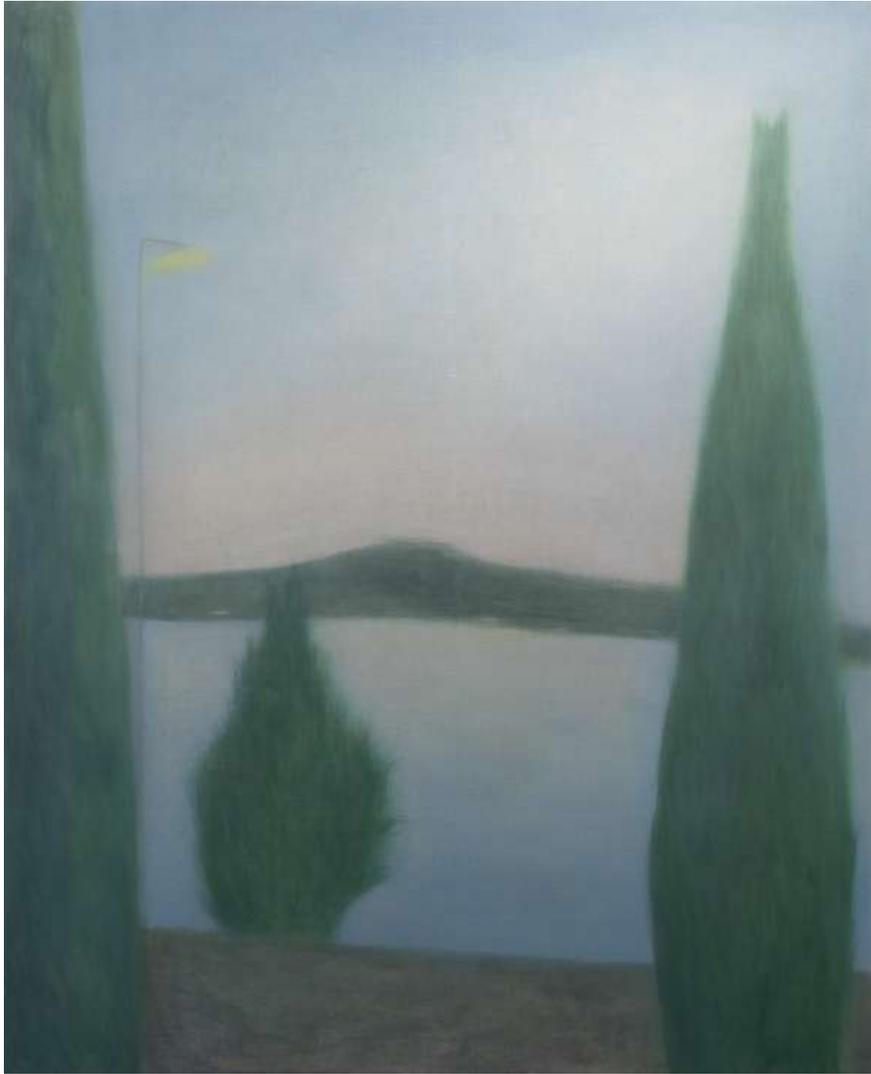
叢に灯る

湯浅 泰将

琵琶湖に生育する葦の穂を叢の中に灯る光のように表現しました。

高知麻紙、水干絵具、岩絵具

1167×910mm



NO.22

ここ

劉 峻如

現実には存在しない風景でありながら、どこかで見たことがあるような感覚を呼び起こす場所を描いている。国や土地を越えて共有される記憶やノスタルジアを通して、「家」に帰ったときの安心感を表現した作品。

キャンバスに油彩

1620×1303mm



NO.23

記憶の海

劉 峻如

固定された建築としての「家」ではなく、船という移動する存在を仮の住処として捉えた作品。漂泊しながらも安心できる空間の可能性を描き、「家」の意味を拡張することを試みている。

キャンバスに油彩

1120×1940mm

NO.24

GRAND BOUQUET

BIBI LEI(ビビ・レイ)



《Grand Bouquet》において、ビビ・レイは花束を、単なる装飾ではなく、感情を宿した存在たちが集う輝かしい場へと昇華させています。花々は静かに息づき、深い感情を湛えながらキャンバスいっぱいに広がります。

鮮やかなピンク、エレクトリックブルー、柔らかなイエロー、そして瑞々しいグリーンが響き合い、大きく咲き誇る花々が画面を満たします。それぞれの花卉は、色彩の中に優しくほどける秘密のように重なり合い、祝祭的でありながら親密な空間を生み出しています。花々の間からそっと現れるのは、レイの象徴的な大きな瞳の少女たち。宇宙のように奥行きをたたえた瞳と、小さなハート形の唇を持つ彼女たちは、この花の聖域の内側から世界を静かに見つめているかのようです。

花々は「動いている」というよりも、確かな存在感を放っているように感じられます。厚く重ねられた絵具は渦を描きながら立体的なふくらみを生み、それぞれの花に感情の重みと温度を与えています。そのスパイラルは記憶の雲や感情のほとぼしりのようでもあり、即興的で誠実な筆致がそのまま画面に刻まれています。画面下部では、虹色の絵具が静かに滴り落ち、上部の高揚感とは対照的な、率直で繊細な側面を示しています。それらの滴りは、あふれ出た感情の痕跡のようにも見えます。

中央で束ねられた鮮やかなグリーンの茎は、画面全体をひとつに結びつける鼓動のような存在です。この花束は単なるアレンジメントではなく、想像力や感情、内なる自己がともに咲き誇る集合体となっています。

《Grand Bouquet》は、色彩に包まれたアイデンティティ、無垢さと強さが共存する世界、そして装飾を超えた心からの美しさを私たちに提示しています。

キャンバスにアクリル 1120×1940mm